

令和 3 年 6 月 22 日現在

機関番号：74305

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00948

研究課題名(和文)近世・近代の日本における「行き倒れ」とその救済の歴史的特質の究明

研究課題名(英文) Historical research on people dying in streets(Yukidaore), social supporting and administrative relief for them since early modern times to modern times in Japan

研究代表者

藤本 清二郎 (FUJIMOTO, Seijiro)

公益社団法人部落問題研究所・その他部局等・研究員

研究者番号：40127428

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では日本近世・近代の「行き倒れ」について大きくは次の2点を解明した。すなわち(1)近世の中国・四国地方や近畿・中部地方における「行き倒れ」を分析し、地域的な特徴を持ちながら、徳川綱吉の「生類憐み」理念と民衆的な相互扶助精神に基づいた、百姓・町人身分さらに乞食非人を対象とした救済と処理、大坂の非人「行き倒れ」処理の具体像、構造について解明した。(2)近代の「行き倒れ」の実態と特質に関し、「行き倒れ」の男女差の統計的分析を統計資料自体の検討を踏まえて行うとともに、全国最多の「行き倒れ」発生地東京の戦前・戦時下の「行き倒れ」の実態と発生の背景を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近世になると古代の死穢意識が薄まり、縁者以外の死体処理が可能となり、行倒死人処理が実行されるようになった。また18世紀以降、旅行病人が多く生じるようになり、「生類憐み」理念に基づき、かつ身分的性格をもつ旅行病人に対して療養システムが形成され、幕末まで続いた。近代になると、人々の自由な移動によって東京を終着点とする「人の移動の全国的構造」が漸次形成され、移動を前提とした「行き倒れ」対応法制が制定されたが、救護・取扱の責任は「行き倒れ」地の市区町村、その財政負担は当該府県に委ねられたことにより、府県間の矛盾が醸成された。本研究によって「行き倒れ」諸現象の歴史的展開の解明が飛躍的に進展した。

研究成果の概要(英文)：This research brought out two social issues related to nomads to collapse and dying in streets (Yukidaore) from Tokugawa period to modern times. Firstly, we analyzed their peculiarities in Chugoku, Shikoku and other regions in Edo Period. Our study exposed how to relief and treat peasants, townsmen, travelers and beggars when they almost died based on public idea "Shohrui-Awaremi" enacted by the fifth Shogun Tokugawa Tsunayoshi and mutual aid among people at pre-modern times. Especially, we could make clear concrete facts of treatment of beggars in Osaka City. Secondly, we verified statistics in modern Japan relevant to above-mentioned nomads and did statistical analysis focusing on difference between men and women for we attempted to expose reality and specialty of them. We could elucidate their social situation in Tokyo where had had most relief population of them since Meiji period to wartime of World War and social background to emerge numerous of them.

研究分野：日本近世史

キーワード：行き倒れ 乞食非人 旅人病人 四国遍路 行旅病人 行旅死亡人 木賃宿 浮浪者

1. 研究開始当初の背景

本研究は「近世・近代の日本における「行き倒れ」とその救済」を対象とするが、そのテーマ設定に到る前提として先行する科学研究「行き倒れに関する国際比較地域史研究—移動する弱者の社会的救済・行政的対応の分析」（基盤研究(B)、藤本清二郎代表 2015～2017)があった。この研究には、①「行き倒れ」に包含される類似現象群を、日本史の近世と近現代の継承・断絶の中で捉えること、②弱者の移動現象を世界史レベルで、地域事例に即して比較し、構造的に理解すること、③さらに日本近現代の貧困・捨子に対する救恤・救護という福祉政策の歴史的展開を捉えることが含まれていた。この研究経過から、日本の近世・近代を主たる対象として「行き倒れ」現象のそれぞれの歴史段階における構造的な理解と特質把握を進め、日本史の展開の中に位置づける課題が認識された。

近世の「行き倒れ」は、死者慰霊の民俗史や旅行史、被差別身分史、遍路研究等の成果から、 α 出稼ぎ型、 β 参詣巡拝型、 γ 貧窮没落型に区分される。このうち、 α 型・ β 型では帰属する共同体（町・村）に戻ることを前提とするが、 γ 型では帰属する共同体を失うためこれに戻ることがなく、流浪し、乞食非人化するという特質を上記科研の研究で解明していた（藤本）。一方、近現代の「行き倒れ」研究は、社会福祉史・福祉政策研究分野で先駆的に行われていたが、研究分担者の竹永三男が、二期にわたる科学研究（2009-2012 年度「近現代の日本における行旅病人・行旅死亡人に関する歴史的研究」、2013-2015 年度「近現代日本の「行き倒れ」に関する地域史的・比較史的研究」）で、「行き倒れ」の実態の究明、関係法制の成立と展開を跡付けた後、上記科研（藤本代表 2015-2017）で女性・子供の「行き倒れ」の分析を進め、維新时期から 1920 年代に至る時期の研究を進展させていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近世・近代における社会的弱者に対する救済法制・行政制度と地域社会の救済対応の歴史的な特質を解明するとともに、古代から近世に至る「行き倒れ」現象の展開過程、近現代との連続・断絶についての理解を深め、前進させることにある。

(1) 近世中期から後期にかけて人々の移動が格段に増加し、移動中の病気や手形盗難等の移動困難、死亡などによる「行き倒れ」も増加した。これらの「行き倒れ」を生み出す社会的状況とその変化を視野に入れ、①対象地域を拡げて「行き倒れ」に対する村方の救護・処理の慣行を確認し、②これに対応する幕藩領主の政策と理念を把握し、③近世段階の歴史的な特質を解明する。

(2) 近代では、近世地域社会の救済慣行を前提として、法令規則により市町村が「行き倒れ」の救護・取扱いを担当するが、①この「行き倒れ」対応行政とその対象である「行き倒れ」の実態を、1930 年代から戦時下に至るまで延ばして分析し、②併せて基礎史料である統計資料の検討を進め、近代から現代に渡る「行き倒れ」研究を完成させる。

3. 研究の方法

本研究では、日本近世・近現代において、人が元々暮らしていた状態から、生活の困窮や参詣・出稼ぎ等を理由として一時的または長期に移動し、その途上で病気や飢えという困難に遭遇した状態およびその状態に陥った人々を「行き倒れ」と定義する。従って、「行き倒れ」には病人・死人の両態があり、これらの総体を分析対象として設定する。このことを前提として、「行き倒れ」を対象として、日本の前近代・近現代の通時的展開、各時代の構造的な特質の把握をめざした。

(1) 近世史分野では、①中国地方・畿内近国・中部地方の藩領を対象に「行き倒れ」の実態、療養・継送り等の救護政策、領主の対応理念について分析する。とくに参詣巡拝型と貧窮没落型の混合的な事例を対象に 19 世紀の歴史段階を検討する（研究代表者：藤本清二郎）。②さらに四国遍路における「行き倒れ」、大坂における非人の「行き倒れ」を分析し、研究の広域化、普遍化を追求する（研究協力者：町田哲・同：塚田孝）。総じて「行き倒れ」の全体像を展望する。

(2) 近代史の分野では、①政府・府県統計は行政施策実施の基礎資料を得るために調査・作成されることから、『日本帝国統計年鑑』『大日本帝国内務省統計報告』と府県統計書に着目し、これらの統計が表示する「行き倒れ」関係項目の登場・変遷を精確に追跡・分析する、②全国最多の「行き倒れ」発生地である東京府の「行き倒れ」の実態とその対応行政を解明するため、その発生経路を「木賃宿止宿者」→「浮浪者」→「行き倒れ」と仮説的に想定して分析する（研究分担者：竹永三男）。

4. 研究成果

(1) 近世の「行き倒れ」と対応の歴史的展開

近世の「行き倒れ」現象はA交通史・B飢饉史・C身分史・D貧困史研究において追究され、成果がある。以下それぞれの研究史と関わらせて成果を述べる。なお、藤本「近世「行き倒れ」の構造と展開—貧困・身分（乞食非人）・移動—」（『歴史科学』243、2020年11月）に引用論文等の典拠を示している（注記省略）。それ以外の論文等については末尾に典拠を示す。

① 近世の旅人病人対策の展開—A交通史とC身分史の交点—

17世紀、幕府は「往還之旅人」（稼ぎ・参拝等）の一宿を許可し（『徳川禁令考』3521）、広島藩法では一時的な移動を「他出」「他国出」とし、他領からの移動者を「旅人」と表現している。18世紀に入ると生活と参詣目的に旅人が増大し、移動過程の「行き倒れ」が生じた。このため幕藩政治において救護策が見られるようになった。鈴木則子は「癩者」の移動に関わって「病人の村送りシステム」が「生類憐み」政策による点を指摘し、松本純子は元禄元年（1688）の病人旅人養生・送出禁令（道中奉行の街道触れ）政策を「公儀救療論」とした。これに対し、柴田純は、明和4年（1767）に幕府が旅行者保護体制＝「パスポート」体制を確立させたとした。

藤本は幕法、諸藩法を検討し、松本説に近い結論を得た。薬服用・国元注進など救護の方法が明示されており、旅人病人の救護・保護措置令と位置づけられる。その後医師の診察義務が加味されてゆくが、病人保護の思想基盤は「生類憐み」である。この思想が村落社会では「お互い様」という扶助精神として定着する。その保護政策の拡がりの始点は幕府元禄令であり、かつ幕末まで続いた点が注目される。紀州藩では、幕令通達以前から病気の「他国之旅人」保護策があったが、幕令が領内に触れられることによって保護策は発展、定着した。

明和4年（1767）の幕府「継送り令」は、「生類憐み」理念に基づき行倒人を保護しつつ、滞留を阻止（＝帰村促進）する政策である。大坂町奉行所管轄下播州林田藩では直後に通達され、広島藩は安永2年（1773）に、紀州藩は安永8年（1779）に領内に触れられた。このように諸藩の事情に応じてゆっくりと受け入れられ、旅人病人継ぎ送りシステムは近世固有の全国的な制度として定着した。往来手形については、17～18世紀前期には諸種の手形（身元保証書、通行手形、捨手形等）があり、これが明和4年令をきっかけに村役人「往来一札」に整理される傾向にあった。とはいえ旦那寺発行と村役人発行とが併存した。また「往来一札」の所持を根拠に継ぎ送りが許可されたが、口頭説明で了解される場合も多く、保護政策は往来手形唯一主義ではなかった。

なお、死体処理に際して非人乞食との身分区別をするために手形制度が成立したとの理解もあるが（柴田説）、身分確定の便宜は結果にすぎず、乞食身分の判断は風体等から総合的になされた。むしろ「捨手形」（現地処理の明記）によって、人管理を、人別が帰属する領主の手から死去地の領主の管轄に移行させ、支配領主を越える親族の葬送関与を断ち切ることを目的としたと理解される。古代・中世以来、死・葬送に携われるのは親族のみであるとの観念は継続しており、捨て文言（現地＝他人埋葬許可文言）により、村間だけでなく、領主間手続が簡素化された。形式の確立された往来手形の効能はこの面で大きい。パスポート体制論は生きた人間に関する面のみであって、死者に関わる評価が含まれていない。

近世では、移動先の行倒人は帰属地と繋がっており、身分制、身分社会の特質が伴った。また「行き倒れ」対応の費用負担は町・村が負担するが、これは成熟した村社会の存在を前提しており、近世はかかる身分制下の移動内包社会であった。

② 飢饉時移動と19世紀段階の「行き倒れ」—B飢饉史・C身分史・D貧困史の交点—

次に飢饉時の「行き倒れ」について確認しておく。15世紀の二度の大飢饉において諸階層に多数の死者があり、室町幕府・有徳人による乞食・貧人への施行が行われた。江戸期17～18世紀においては、飢饉時に生存・生活の困難が一举に拡大し、飢人・乞食が析出されて移動し、「行き倒れ」が生じた。飢饉時には施行対象者が出身の町・村へ復帰する道と、非人（貧人）＝乞食集団の一員となる道とがあった。後者の道は非人身分の形成・拡大史である。19世紀半ば頃、天保飢饉に際して、江戸では四宿御救小屋が設立され、江戸市中の行倒人を収容したが、時限的な措置であった。東北4藩では「飢人」が数万人規模で移動し、人口が大きく減少した。巨大な規模で深刻な状態が生み出された。天保飢饉の帰結は西日本・江戸・東北いずれも人返し、労働力移動が基本であった。飢饉時の「行き倒れ」対策は、一時的臨時的救済であり、かつ幕府の救済政策は直轄地を個別に対象とし、国家的対策とはならなかったという特徴を持つ。飢饉時の移動と「行き倒れ」は中国・朝鮮の「流民」と共通するが、国家的対応は異なっていた。今後の比較研究が必要である。

また天保飢饉による「行き倒れ」は、日本列島の移動世界に多大な影響を与えた。19世紀の経済変動や社会構造の変化を背景に、移動世界に貧困化・永続化という傾向をもたらした。例えば紀州藩田辺領の「行き倒れ」は、1800年を境に約三倍化した（柴田純）、この時期における貧困層の離村、移動の永続化、無宿・野非人の増大と流動層の拡大が注目される。町田哲は阿波の遍路の分析から飢饉の長期的影響を指摘している。天保8年（1837）信州を出立した親子連れは、偽手形を持っており、飢饉時、困窮のため出村し移動して糊口を凌ごうとした。四国遍路は「四国執行（物貰い）」であり、当初の家族連れは、途中消滅が進んで行くという。播州林田藩領の行倒人も四国遍路を目指していた。19世紀には旅人の移動貧困層（乞食・非人との境界的存在）の拡大、永久的廻国という状況が見られるようになった。彼等は、村内の扶助や夜逃げ等で再生産が成り立つ貧困層とは区別される「移動貧困層」である。「移動貧困層」の中には、確実に家族を減少させ、路上に消えゆく「悲惨な末路」を辿る「絶対的貧困層」が存在した。これらは19世紀の「行き倒れ」の質を規定している。

(2) 前近代「行き倒れ」の通時的理解と近世の到達段階

日本古代の行旅人について、今津勝紀は平城京へは諸国からの調庸物を運脚する脚夫で多数の人口移動があり、脚夫の往還時に脚夫の乞食化がみられ、横死者がでたこと、国家に医療供給義務があることを示した。坂江渉は、身内・隣人・使用人が病気になるれば彼らを「路辺」に出棄・放置し、古代の道は「貧困・病・死」の問題が集約的に表れる場であったこと、地方寺院が「在路飢病者」の救済に当たったことを指摘した。また勝田至は中世の葬制について、12、13世紀の「棄つ」「置ク」と「葬」とは対比的に用いられ、墓域・川原・谷・路辺・荒野における「死体遺棄または風葬」の慣行が一般的に行われていたことを指摘した。阿部知博は近世の死体取扱について、17世紀末期以降、死骸は「捨て」る状況から、国家管理が進み、「埋め」ることが指示されるようになったと指摘した。「捨て」から「埋め」への変化は、古代・中世の「死穢」（親族以外の死への関与忌避原因論：勝田）が、民衆世界および武家領主世界において基本的に克服されたことを意味し、その変化は「生類憐み」政策、「公儀救療」へとつながる。すなわち、17世紀は古代～近代の一大転換期と位置づけることができる。なお、対象が「乞食」「乞食躰」の場合、巨大都市大坂では大量に発生する非人の行き倒れ死体は粗雑な土葬（「投げ込み」）であり（塚田孝）、地方では病死状態を無視、放置するなどの差別が存在した。同時に医師を呼び救療の姿勢を見せる場合もあり、「取置」=仮埋も広く行われた。

公儀・領主は「生類憐み」のかけ声と死者の管理だけで、負担・実施を領民に任せていたが、相互扶助の通念を基礎とした行倒人への対応は、一定の民富の蓄積、経済力が想定される。また医師の存在も前提とされ、「福祉・窮民救済の意味合い」（海原亮）の救済が確保されていた。

近世から近代への移行について。近世の移動病人飢人(A)保護は「生類憐み」思想や百姓・町人の身分保護、非人乞食身分化という特質を持ち、明治以降は身分的規定性が無く、行旅病人の救護は貧困者救恤に限定される。すなわち、近現代の行旅病人(a)対応には繋がらない。一方、近世の行倒死人(B)は死体放置場所の衛生管理（腐敗排除）、往生等の観点から場所管理の原則が働き、死体を除去する必要がある。これは近代の行旅死亡人(b)に対しても不可欠な行政的措置であり、村・県か国家のいずれかの業務課題となる。すなわち近世から近代にかけては(A)-(a)の面で断絶し、(B)-(b)の面で継承しているとの見通しが得られた。

(3) 近現代の「行き倒れ」関係統計資料の検討結果と戦前・戦時下東京の「行き倒れ」

近代史分野で明らかにした第一の問題は、「行き倒れ」研究の基礎資料である『日本帝国統計年鑑』『大日本帝国内務省統計報告』所掲の「行き倒れ」関係項目の変遷過程を、初出の1876年の統計事実に遡って明確にしたことである。この点では、複雑に変化する「行き倒れ」事象の統計上の表記（用語）を逐一追跡するとともに、府県統計書の記述とも比較検討した。これによって、行旅病人・行旅死亡人の夫々について、統計書上の表記の変遷過程が明確になり、今後の統計利用の前提を明確にした。

第二に、この作業を通して、「行き倒れ」人数の男女差（行旅病人・行旅死亡人とも男が女の三倍以上）を明確にするとともに、この男女差（男が女より格段に多い）は、自殺者（明治初年から現代まで）・餓死者（松方デフレ期）にも見られることを明らかにし、「行き倒れ」研究における性差の問題解明の重要性を提起した。このことは、近世段階での「行き倒れ」の性差への注目が必要であることを提起することにもなった。

本科研における近現代分野での研究成果の第三は、戦前期を通して一貫して全国最多の「行き倒れ」発生地である東京府、就中東京市について、1920年代から戦時下に至る時期の「行き倒れ」の実態と構成、発生要因を究明したことである。その際、1920年代については、東京府社会課の『行旅病人行旅死亡人ニ関スル調査』（1926年）の分析によって「行き倒れ」人の特徴とともにその「浮浪」の構造を明らかにし、東京における「行き倒れ」に至る人々が滞留・定着しながらも定住していない（安定した住居をもたない）実態を明確にした。

この成果に基づいて、「浮浪」実態の内実を明確にするため、「木賃宿止宿者」と「浮浪者」に着目して東京市社会局の「木賃宿調査」、東京市統計課および東京市養育院の「浮浪者調査」の系統的分析を行った。その結果、「木賃宿止宿者」「浮浪者」の人数と構成を明らかにするとともに、「木賃宿止宿者」→「浮浪者」→「行き倒れ」という都市下層の存在形態と推移関係を明らかにした。

最後に、近代の「行き倒れ」の終局の形態である戦時下の「行き倒れ」の実態を、東京都公文書館所蔵の行旅病死人台帳（「昭和十六年 行旅病人死亡人救ゴ」）によって解明した。この点では、総力戦体制の下、度々の「浮浪者・乞食」検挙・収容行政の下でも、「行き倒れ」が多数発生し続けていること、その「母数」である「浮浪者」も存在し続けていることを明確にした。

以上により、巨大都市東京に集中していく戦前期の「行き倒れ」の終局の状況を明らかにすることができた。

なお、本科研費研究の成果として、藤本・竹永編『近世・近代の日本における「行き倒れ」とその救済の歴史的特質の究明—国際比較を加味して—』（科学研究費助成事業報告書、2021年3月30日刊。一部先行する科研の国際比較論文を含む）をまとめ、関係研究機関・図書館等に配送した。その巻頭論文「総論『行き倒れ』—移動する弱者とその救済—」（藤本・竹永分担執筆）に成果を要約している。参照頂きたい。

また、本科研研究の成果の一部は、竹永三男『「行き倒れ」の近代史』（部落問題研究所、2021年度刊行予定）に反映される。また藤本清二郎は成果の一部を『近世行き倒れの研究（仮題）』として近年の内に刊行することを展望している。

<典拠文献>

鈴木則子「近世癩病観の形成と展開」（藤野豊編『歴史の中の「癩者」』、ゆみる書房、1996年）

今津勝紀「脚夫・乞食・死穢」（佐々木虔一他編『日本古代の輸送と道路』、八木書店、2019年）

勝田至「中世民衆の葬制と死穢」（『史林』第70巻第3号、1987年5月）、後に同『日本中世の墓と葬送』（吉川弘文館、2006年）

海原亮『近世医療の社会史—知識・技術・情報』（吉川弘文館、2007年）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 14件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 藤本清二郎	4. 巻 -
2. 論文標題 総論 「行き倒れ」 - 移動する弱者とその救済 1 研究史と本研究の成果 日本前近代	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 藤本他編 『近世・近代の日本における「行き倒れ」とその救済の歴史的特質の究明』	6. 最初と最後の頁 11-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藤本清二郎	4. 巻 -
2. 論文標題 補論 安芸国「浮過」家族の善光寺参詣 19世紀段階の行き倒れと移動と特質	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 藤本他編 『近世・近代の日本における「行き倒れ」とその救済の歴史的特質の究明』	6. 最初と最後の頁 150-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藤本清二郎	4. 巻 236
2. 論文標題 近世の善光寺・周辺地域における移動と行き倒れ・救済	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 部落問題研究	6. 最初と最後の頁 87-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藤本清二郎	4. 巻 243
2. 論文標題 近世『行き倒れ』の構造と展開 - 貧困・身分・移動 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史科学	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本清二郎	4. 巻 233
2. 論文標題 近世芸備地方の移動と行き倒れ(病人・死人) 一九世紀の生存・救済	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 部落問題研究	6. 最初と最後の頁 25 - 54
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本清二郎	4. 巻 232
2. 論文標題 近世の行倒片付、旅人病人対策の法的展開 - 広島藩の場合 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 部落問題研究	6. 最初と最後の頁 2-25
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本清二郎	4. 巻 40
2. 論文標題 徳川吉宗の母浄円院の系譜 - 大工頭中井家との関係 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 紀州経済史文化史研究所紀要	6. 最初と最後の頁 21-52
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.19002/AN00051020.40.21	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本清二郎	4. 巻 227
2. 論文標題 近世における移動・行き倒れの構造(試論) - 播州・林田藩領の事例から -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 部落問題研究	6. 最初と最後の頁 2-27
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本清二郎	4. 巻 39
2. 論文標題 紀州藩における旅人病人継ぎ送り政策の展開	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 紀州経済史文化史研究所紀要	6. 最初と最後の頁 1-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹永三男	4. 巻 -
2. 論文標題 総論 「行き倒れ」 - 移動する弱者とその救済 2 研究史と本研究の成果 日本近現代	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 藤本他編 『近世・近代の日本における「行き倒れ」とその救済の歴史的特質の究明』	6. 最初と最後の頁 29-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹永三男	4. 巻 235
2. 論文標題 戦前・戦時体制下の東京における「行き倒れ」の実態 - 「行旅病人」「木賃宿」「浮浪者」に関する調査の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 部落問題研究	6. 最初と最後の頁 33-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹永三男	4. 巻 243
2. 論文標題 近現代の「行旅病人」「行旅死亡人」の内実と「行き倒れ」人数の男女差 法令・官報「行旅死亡人公告」・関係統計の検討から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史科学	6. 最初と最後の頁 15-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塚田孝	4. 巻 234
2. 論文標題 道頓堀周辺の非人行倒れ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 部落問題研究	6. 最初と最後の頁 2-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塚田孝	4. 巻 -
2. 論文標題 近世の非人身分と史料 大坂の垣外仲間に即して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 塚田他編『日本近世の都市社会と史料』	6. 最初と最後の頁 83-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塚田孝	4. 巻 大坂
2. 論文標題 道頓堀周辺の地域社会構造	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 塚田孝編『シリーズ三都 大坂巻』(東京大学出版会)	6. 最初と最後の頁 303 - 330
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 町田哲	4. 巻 233
2. 論文標題 近世の行き倒れへの着目と課題 四国遍路研究の立場から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 部落問題研究	6. 最初と最後の頁 55-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 町田哲	4. 巻 232
2. 論文標題 村方文書からみた四国遍路 国元・宿泊・費用	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 部落問題研究	6. 最初と最後の頁 26-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 藤本清二郎
2. 発表標題 「非人」「乞食」と「非人体」「乞食体」の片付について 各地の事例の整理
3. 学会等名 20年度科研費合同研究成果発表会 (3月23日)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤本清二郎
2. 発表標題 近世善光寺の捨子とその対応
3. 学会等名 19年度科研費合同発表会 (3月26日)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤本清二郎
2. 発表標題 近世信州善光寺門前の行き倒れとその対応 19世紀段階「移動」の特質
3. 学会等名 大東文化大学経済学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤本清二郎
2. 発表標題 近世芸備地方の移動と行き倒れ
3. 学会等名 第57回部落問題研究者全国集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤本清二郎
2. 発表標題 紀州藩における乞食非人・巡礼の行き倒れについて
3. 学会等名 部落問題研究所歴史研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤本清二郎
2. 発表標題 近世『行き倒れ』の構造 貧困・身分(乞食・非人)・移動
3. 学会等名 大阪歴史科学協議会7月例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤本清二郎
2. 発表標題 近世『行き倒れ』の構造と貧困・身分(乞食・非人)・旅
3. 学会等名 近世史フォーラム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤本清二郎
2. 発表標題 紀州藩における旅人病人継ぎ送り政策の展開過程
3. 学会等名 部落問題研究所歴史研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 竹永三男
2. 発表標題 近代日本における「行き倒れ」の地域的構成・推移とその特徴
3. 学会等名 20年度科学研究成果発表会（3月23日）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 竹永三男
2. 発表標題 戦前・戦時体制下の東京における「行き倒れ」の実態と構造
3. 学会等名 部落問題研究所歴史研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 竹永三男
2. 発表標題 「行き倒れ」人の子どもと子どもの「行き倒れ」 日露戦後の福島県の事例の紹介
3. 学会等名 19年度研費合同発表会（3月26日）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 竹永三男
2. 発表標題 行旅病人・行旅死亡人関係公文書（県庁文書・町村役場文書）の保存・公開状況 全国の公文書館調査から
3. 学会等名 部落問題研究所歴史研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 竹永三男
2. 発表標題 日本における「行き倒れ」と救済の歴史的展開
3. 学会等名 大阪歴史科学協議会7月例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 塚田孝
2. 発表標題 大坂「千日前墓所一件」に見える心中
3. 学会等名 20年度科学研究成果発表会（3月23日）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 塚田孝
2. 発表標題 近世大坂・千日墓所における非人行倒れ
3. 学会等名 2019年度ワークショップ「日中都市史研究の新しい課題代」（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 塚田孝
2. 発表標題 道頓堀周辺の非人行き倒れ
3. 学会等名 第57回部落問題研究者全国集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 町田哲
2. 発表標題 近世の札所寺院と行き倒れ 四国霊場五番札所地藏寺を中心に
3. 学会等名 20年度科研費合同研究成果発表会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 町田哲
2. 発表標題 行き倒れへの着目と課題 四国遍路研究の立場から
3. 学会等名 第57回部落問題研究者全国集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 藤本清二郎・竹永三男編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 (自費出版)	5. 総ページ数 388
3. 書名 近世・近代の日本における「行き倒れ」とその救済の歴史的特質の究明 - 国際比較を加味して -	

1. 著者名 塚田孝	4. 発行年 2019年
2. 出版社 花伝社	5. 総ページ数 312
3. 書名 日本近世の都市・社会・身分 身分的周縁をめぐって	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	竹永 三男 (TAKENAGA Mitsuo) (90144683)	公益社団法人部落問題研究所・その他部局等・研究員 (74305)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	塚田 孝 (TSUKADA Takashi) (60126125)	大阪市立大学・大学院文学研究科・客員教授 (24402)	
研究協力者	町田 哲 (MACHIDA Tetsu) (60380135)	鳴門教育大学大学院・学校教育研究科・准教授 (16102)	
研究協力者	西尾 泰広 (NISHIO Yasuhiro) (70469641)	公益社団法人部落問題研究所・その他部局等・研究員 (74305)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------